

## ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本 1927 番 第 42-51 葉に関する記述

A Further Description of Cod. Vat. gr. 1927, ff.42v-51:  
A Comparison with the Marginal Psalters

辻 絵理子\*  
TSUJI Eriko

ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番は、11 世紀末から 12 世紀頃にビザンティン世界で制作された挿絵入りの詩篇写本である。全 289 葉に 145 もの図像を有する貴重な作例だが、その独特の図像体系には比較対象となる写本が現存しない。本稿は同写本のテキストと挿絵、銘文を突き合わせ、同じ章句に挿絵を有する他の余白詩篇写本作例や、ダヴィデ伝図像を持つ他のジャンルの写本と比較しながら、紙幅の許す限り分析を進めていく試みの一部である。ここでは 1927 番の第 42 葉～51 葉、本文である詩篇は 26 篇～31 篇について論じている。

キーワード：ビザンティン美術、写本挿絵、詩篇

過去の論考に引き続き、ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番（Cod. Vat. gr. 1927、以降「1927 番」）に描かれた挿絵及び銘文の記述と、同一の詩篇章句に挿絵を有する余白詩篇写本の比較を行っていく<sup>1</sup>。

### f. 42v

詩篇第 26 篇に対応する挿絵である。画面中央上の天穹にキリストの半身が描かれ、その下に立つ白髪に王冠を被ったダヴィデが右手を上、左手を下に向ける。左から 4 人の男がダヴィデの方へ歩み寄り、右側には 5 人の男性が折り重なって倒れている。背後の丘の上に、建築モチーフとキボリウムが描かれている。

ダヴィデの頭上に見られる「κ(ύριος) φωτισμός (μου) 主は（私の）光」の銘文は、26 : 1「主は

\* つじ・えりこ、埼玉大学准教授、西洋美術史、ビザンティン美術史

<sup>1</sup> E. T. De Wald, *The Illustrations in the Manuscripts of the Septuagint, III, Psalms and Odes, Part 1: Vaticanus Graecus 1927*, Princeton, 1941. 同写本及び比較作例の基本的な解説と参考文献、重複する註については過去の論考を参照されたい。辻絵理子「ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本 1927 番 第 1-2 葉に関する記述」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 56 巻第 2 号、2020 年、97-103 頁、同「第 3-10 葉に関する記述」第 57 巻第 1 号、2021 年、55-65 頁、同「第 12-24 葉に関する記述」第 57 巻第 2 号、2022 年、71-82 頁、同「第 29-41 葉に関する記述」第 58 巻第 1 号、2022 年、99-108 頁。各写本の比較にあたっては S. Dufrenne, *Tableaux synoptiques de 15 Psautiers médiévaux à illustrations intégrales issues du texte*, Paris, 1978 も参照している。写本のカラー図版は、大半がオンラインで一般公開されている。ヴァティカン図書館デジタル・コレクションズ <https://digi.vatlib.it/mss/>（最終閲覧日 2022 年 12 月 26 日）、大英図書館デジタル化写本 <https://www.bl.uk/manuscripts/>（最終閲覧日 2022 年 12 月 26 日）。

わが光、わが救い。／私は誰を恐れよう。／主はわが命を庇う盾となる方。／私は誰におののくことがあろう」<sup>2</sup>からの引用である。同様に、右で倒れ伏す群衆の欄外下にかかれた「αὐτοὶ ἰσθὲνθα(ν)(sic)<sup>3</sup> (καὶ) ἔπεσ(αν) 彼らは弱り果て、倒れた」は、26:2「悪をなす者が私の肉を食らおうと近づくと／私を苦しめる者、私の敵のほうが、かえって／つまずき、倒れた」を踏まえている。左の群衆の欄外左には、26:12「私を苦しめる者たちの魂に／私を引き渡さないでください。／不義・不正の証人たちが／私に対して立ち上がったのです」から「ὅτι ἐπανεστήσαν μ(οι) μὲρμρ(=μάρτυρες)<sup>4</sup> ἄδι(κοι) 不正な証人たちが私に立ち上がった」とある。ダヴィデの左右に描かれた者たちは、どちらも敵のようだ。銘として引用されていないが、丘の上に描かれたキボリウムと建築モチーフは、26:4で言及される「主の家に ἐν οἴκῳ κυρίου」、「神殿を τὸν ναόν」を踏まえた表現と考えられる。キボリウムについては、続く第27篇にも同様の文脈で描かれているため、神殿や聖所と理解して差支えないだろう。

第26篇に挿絵を有する余白詩篇写本の作例も確認しておこう<sup>5</sup>。『クルドフ詩篇』f.24、『テオドロス詩篇』f.28、『バルベリーニ詩篇』f.44vが26:1に対応する挿絵を描いている。どの写本でも堅琴と羊飼いの杖を手に持った若いダヴィデが木々の間に立っており、羊や山羊が草を食む。11世紀の2写本では、仔羊を咥えた狼を牧羊犬が追いかけている。銘文は『クルドフ』に「ΔΔΔ ΠΡΟ ΤΟΥ ΒΑΔΙΛΕΥΕΙ 玉座に就く前のダヴィデ」、「テオドロス」に「πρὸ τοῦ χρυσῆναι 塗油の前に」と記されている。『バルベリーニ』の銘はダヴィデの名前のみである。1927番とは、本文の解釈が全く異なっていることが判る。

1927番が挿絵と結びつけていない26:10「父と母は私を見捨てましたが／主は私を受け入れてくださいました」には、『テオドロス』f.29、『バルベリーニ』f.45vのみが絵を施す。両親と思しき男女と反対側に向かって、キリストに手を引かれて歩む若い修道士の姿が見られる。2写本ともに、キリストはテキストコラムの方へと小柄な青年を導いている。

## f. 44

この一葉は、挿絵を傷めぬよう各葉の間に挟まれている薄葉紙ごと撮影されてしまったものがヴァティカン図書館データベースで公開されているため、細部の確認が困難である。第27篇の挿絵で、画面中央に跪いたダヴィデが両手を掲げて天穹を見上げる。背景の丘は左右で塗り分けられており、左手前にキボリウム、右奥にバシリカ式の建築モチーフが描かれている。薄葉越しには判別し難いが、ドゥヴァルトのモノクロ図版を確認すると、キボリウムを支える柱は丘の手前に描かれてい

<sup>2</sup> 引用する七十人訳詩篇本文の訳出においては、これまでの論考にも挙げた L. C. L. Brenton, *The Septuagint with Apocrypha: Greek and English*, London, 1851 (rep.); A. Rahlfs, *Septuaginta: Id est, Vetus Testamentum Graece iuxta LXX interpretes*, vol.1, Stuttgart, 1979; A. Pietersma and B. G. Wright (eds.), *A New English Translation of the Septuagint and the Other Greek Translations Traditionally Included under that Title*, Oxford, 2007; 聖書協会共同訳『聖書 旧約聖書統編付き 引照・注付き』、日本聖書協会、2018年、旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV』、岩波書店、2005年に加え、近年出版された秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書 詩篇』、青土社、2022年を本稿から参照している。

<sup>3</sup> ἰσθὲνθα.

<sup>4</sup> μ の上から ρ が刺さっているようなりガチャーひとつで μάρτυρ を意味するが、ここではふたつ並べて書かれることで複数形を示している。

<sup>5</sup> 以降、言及する余白詩篇写本の文献等については註1及び辻絵理子『ビザンティン余白詩篇写本挿絵研究』、中央公論美術出版、2018年を参照されたい。写本の呼称は、初出以降は略す。

ることが判る。右手前では4人の男が黒い洞穴の前で倒れている。

折り重なって描かれた男たちにほど近い余白には、27:1「主よ、私はあなたに向かって叫びました。／わが神よ、沈黙のうちに私を無視しないでください。／さもなければ、私は穴に下りて行く者たちと等しくなります」から引用した「(καὶ) ὁμοιωθήσομαι(αι)(sic)<sup>6</sup> τοῖς καταβαίνουσι(ν) εἰς λά(κκον) 私は穴に落ちて行く者たちと同じになるでしょう」の銘が見られる。ダヴィデの左下余白には27:2「私の嘆願の声をお聞きください／私があなたに向かって嘆願するとき／あなたの聖なる聖所に向かって／私が両手を上げるとき」の後半、「ἐν τ(ῷ) αἴρειν μ(ε) χεῖρας μ(ου) πρὸς να(ὸν) ἁγίόν σου あなたの聖なる神殿に向かって私の両手を挙げる時に」が引用されている。穴に倒れる男たちや聖域を表すキボリウムは、本文を逐語的に絵画化したものと解る。

余白詩篇では、27:1に対して『クルドフ』f.25、『パントクラトール』f.18v、『バルベリーニ』f.46が、跪拝するダヴィデの図像を描いている。1927番と同様に、1節の祈りを詩篇著者と見做されたダヴィデのそれに重ね合わせたものであろう。『クルドフ』のダヴィデには「ΔΑΔΕΥΧΟΜΕΝΟC 祈るダヴィデ」、『バルベリーニ』には名前だけの銘がある。一方、『テオドロス』f.29vも同じ章句に挿絵を施すが、小口側の縦に長い余白を利用して複数の図像を並べ、アクラガスの聖グリゴリオス<sup>7</sup>の物語サイクルを描くという独特な図像選択をしている。

第28、29篇の挿絵は失われている。それに伴い欠けてしまった本文を書き写した新しいフォリオが挿入されている<sup>8</sup>。テキストはオリジナルに似た字体だがそれよりも黒いインクで書かれており、各篇のタイトル下に存在したであろう挿絵は写されていない<sup>9</sup>。

<sup>6</sup> ὁμοιωθήσομαι.

<sup>7</sup> 700年頃、アクラガス（現シチリア、アグリジェント）の主教。祭日は11月24日。A. Kazhdan, s.v. 'Gregory of Akragas,' *OBD*, pp.879-880. ここでは上から、主教の座を狙うサビノスとクリケンティノスの仕掛けた冤罪によりグリゴリオスが罷免される場面、虚偽の告発をする娼婦エウドキアと責め立てる群衆に対しグリゴリオスが反論する場面、倒れるエウドキア、賄賂を受け取った娼婦エウドキアがグリゴリオスの寝所から出るところをサビノスと群衆に目撃させる場面が、縦の余白を用いて順番に描かれている。Ch. Barber (ed.), *Theodore Psalter: Electronic facsimile*, British Library, 2000, f.29v, Commentary, p.5. 図像自体の珍しさもさることながら、物語の時系列を踏まえると図像配置の順番も奇妙である。この後に確認するような単独の礼拝図像でも、特に『テオドロス』は銘で判別可能な聖人を採用する箇所が散見されるが、その採用基準は不明なものが多い。L. Mariès, "L'irruption des saints dans l'illustration des psautiers byzantins," *AB* 68 (1950), pp.153-162.

<sup>8</sup> 1927番は殆どのクワイアがクアテルニオンで構成されているが、欠損箇所の後補については1フォリオを綴じ込むというかたちで行われている箇所が多い。各詩篇冒頭タイトルに隣接してコラム幅の挿絵を描くという性質上、意図的に切り取られた場合、連続した欠損にならないためと考えられる。第28、29篇の挿絵があったと思われるff.45, 47についても、それぞれ1葉ずつ挿入されている。De Wald, p.2. 該当箇所は第6クワイアだが、その中央にあたるf.44とビフォリウムとして繋がっているはずのf.45が欠損したため、失われた本文のみを書き写した1葉を挿入したものであろう。

<sup>9</sup> 第28、29篇に挿絵を持つ余白詩篇を確認しておく。28:3「主の声は大水の上にあらず／栄光の神は雷鳴をとどろかされた。／主は大水の上におられる」に対して『テオドロス』f.31、『バルベリーニ』f.47v、『プリストル』f.44vが《洗礼》の場面を描いているほか、29:4「主の声は威力に満ち、／尊厳のある主の声」には『パントクラトール』f.29、『テオドロス』f.31v、『バルベリーニ』f.48が《ラザロの蘇生》を採用している。詩篇本文で言及される「水」が洗礼と結び付けられ、また本文で語られるように「威力に満ち」たキリストの呼びかけの声に応じてラザロが復活したことを連想した図像であろう。他に、『テオドロス』にのみ見られる挿絵として、f.32の縦の余白を利用し、ダヴィデから顔を背けるキリスト（対応章句は29:8「主よ、あなたはあなたのご意志により、私の美しさに力を添えて下さいました／しかしあなたはその顔をお隠しになったので、私は心を乱されるものとなった」と、ダヴィデを祝福するキリスト（対応章句は29:11「主は聞かれ、私を憐れんでくださった。／主は私の助け手となられた」）が、上下の対になるレイアウトで描かれている。1927番が描く図像の傾向に鑑みると、失われたフォリオに《洗礼》や《ラザロの蘇生》は描かれていなかったのではないかと思われるが、この部分のみが切り取られたことを踏まえると例外的にナラティブな図像を採用していた可能性も否定できない。よりリテラルに、『テオドロス』のみに描かれたダヴィデから顔を背けるキリストのような図像が描かれていた可能性も考えられる。

f. 48

第 30 篇の挿絵には無名の人物が多く登場する。中央に佇み天穹に両手を挙げて祈るダヴィデの背後、画面左側にはチュニックを着た 5 人の男性が話をする身振りで向かい合っている。右下では 4 人の男性が体を折り曲げて倒れており、その背景は黒茶に塗りつぶされている。右上で修道士姿の老人たちが固まって立ち、天穹を讃える身振りを取っている。

左下の余白には「ἐν τῷ ἐπισυναχθῆν(αι) αὐτ(οὺς) ἄμ(α) ἐπ' ἐμ(ἐ) τοῦ λ(α)β(εῖν) τ(ήν) ψυχ(ήν) μου ἐβουλεύσαντ(ο) 彼らが私に反して集まったとき、彼らは私の魂を奪おうと企んだ」の銘があり、30 : 14「私は私の周囲に住む多くの者たちの非難を耳にした。／彼らは私に立ち向かうために集まったのです。／彼らは私の命を奪おうと企んだのです」を踏まえている。ダヴィデの隣で向き合う群衆がどのようなことを話し合っているか窺える。倒れた男たちの横には 30 : 18「主よ、私を辱めないでください。／私はあなたをお呼びしたからです。／不信心な者たちが恥を知り／陰府に導かれて落ちて行きますように」から、「αἰσχυνθείσαν [οἱ] ἄσεβ(εῖς) κ(αὶ) καταχθείσαν εἰς ἄδου 不信心な者たちは辱められた、そして陰府の中に落ちて行った」という銘文が余白に書き込まれている。主を讃美する者たちの右余白には、「ἀγαπήσατ(ε) τ(ὸν) κ(ύριον) πάντ(ε)ς οἱ ὅσοι αὐτ(οῦ) 主を愛せ、彼の全ての聖なる者たち」と書かれ、30 : 24「お前たちは主を愛するのだ、その方の全ての聖なる者たちよ。／主は真理を捜し求められるから。／その方は尊大すぎる振る舞いをする者たちには報復される」との関係が示されている。

余白詩篇では、30 : 2「主よ、私はあなたに希望を置きました。／私がとこしえに恥を受けることがありますように。／あなたの義によって私を助け、救い出してください」に対応して、『テオドロス』f.32v は祈りを捧げる立像の聖アベルキオス<sup>10</sup>と手を伸ばしてそれに応じるキリストのメダイヨン、『バルベリーニ』f.49 には立って祈るダヴィデと祝福するキリストの半身が描かれている。

30 : 5「あなたは彼らが密かに仕掛けたこの罠から私を連れ出して下さいます。／あなたこそ、私を覆う盾」には、余白詩篇に特有のキリスト復活の図像が採用されている。該当箇所は『クルドフ』f.26v、『パントクラートル』f.30v、『テオドロス』f.32v、『バルベリーニ』f.49v で、どの写本にも円錐状の屋根と台座を持つ建築モチーフと前に立つキリスト、手前で折り重なるように眠る武装した 2 人の兵士が描かれる。『クルドフ』では、キリストと墓の間から顔を覗かせる青い衣を纏ったダヴィデの姿も見られる<sup>11</sup>。『パントクラートル』のキリストは墓の前に立ってテキストコラムの方へ語り掛けるような身振りをしている。『クルドフ』の小口ぎりぎりに銘文が残っており、「ANACTACEΩC ΛΕΓΕΙ: ΚΑΙ ΟΙ ΦΥΛΑCCONΤΕC CΤΡΑΤΙΩΤΑΙ...復活について、彼は語る。そして番人である兵士たち……」と読める。『パントクラートル』は眠る兵士の下に「Οἱ φυλάσ[σ]οντες 番人たち」の銘が残るが、後の時代の重ね書きである。どちらにおいても、墓の入口は黒く開いて

<sup>10</sup> 2 世紀、ヒエラポリスの主教。祭日は 10 月 22 日（バーバーは 2 日としているが誤植）。アポロン神殿の偶像を破壊したほか、癒し手としても知られていた。Barber, f.32v, Commentary, p.4. 総主教座には聖アベルキオスの聖遺物があったため、彼の祭日には大きな典礼が行われていた。T. Masuda, "Patriarchal Lectionaries of Constantinople: A New Criterion for the Encaenia," *Waseda RILAS Journal* 8 (2020), pp.182, 186.

<sup>11</sup> K. Corrigan, *Visual Polemics in the Ninth-Century Byzantine Psalters*, Cambridge, 1992, p.67. この章句を復活の場面と結びつける註解は確認されていないが、続く 30 : 7 に διαφυλάσσοντας という単語が用いられていることをコリガンは指摘している。註解については以下も参照。Ch. Walter, "Christological Themes in the Byzantine Marginal Psalters from the Ninth to the Eleventh Century," *REB* 44 (1986), p.278.

いる。11 世紀の『テオドロス』と『バルベリーニ』はどちらも『クルドフ』と殆ど同じ図像を採用するが、金で彩色された墓の扉は閉ざされており、上空に小さく表された天穹からは天使が半身を乗り出している<sup>12</sup>。『バルベリーニ』のみ、『クルドフ』と同様にキリストと墓の屋根に半ば隠れるようにして顔を覗かせる男が見られるが、王冠は被っておらず髯もなく、あるいは羊飼いの時代の若い姿でもないため、同写本のダヴィデ図像と一致しない。『クルドフ』が描くダヴィデは常に立派な王冠を被り文様のついた衣を羽織っているわけではなく、細い金環に小さな額飾りがついただけのような描写も見られる。f.26v で顔の一部を覗かせるダヴィデは頭部に細い金のディアデムが確認できるのみであり、青い衣には金彩の装飾も施されていない。『バルベリーニ』の画家はこれを見て、ダヴィデと判断できなかった可能性がある。11 世紀の 2 写本の図像プログラムは、現存最古の作例である 9 世紀の『クルドフ』の流れを汲むと考えられているが、この箇所のように『バルベリーニ』のみが『クルドフ』と同じ表現を採用している箇所が散見される。加えてこれに続く節のように、『テオドロス』のみが新しい挿絵を描く箇所も少なくない。しかしそれが両写本の挿絵全体に適用できる法則ではないため、3 写本の間には現存しない作例が挟まっていたという仮説がある<sup>13</sup>。『バルベリーニ』の画家が直接『クルドフ』を手本にしたのか、現存しないその写しを参考にしたのかはこの箇所のみで断言できないが、キリストと墓の間に立つ男が何者であるかを理解せずに描いたことは間違いないと言えるであろう。『バルベリーニ』f.49v には関連章句を示すリンク・マークのみが残り、銘はない<sup>14</sup>。

続く章句に挿絵を有する余白詩篇は『テオドロス』のみである。30 : 19「偽りを語る唇は、言葉を失うように／義なる者に対し傲りと蔑みをもって語る唇は」、天穹から伸びた神の右手に祝福される聖アルテミオス<sup>15</sup>の立像が描かれる (f.33v)。1927 番も銘文に引用している 30 : 24 には、キリストのメダイヨンの下で両手を掲げ、左右から祈る無名の修道士たちの姿が見られる (f.34)。本文である 24 節においても用いられている「ἅγιοι 聖人たち」<sup>16</sup>が銘として記されているが、服装によって修道院の聖人に限定されており、同写本の制作地と鑑賞者が影響していると考えられる<sup>17</sup>。

余白詩篇がこぞって復活の場面を描く章句を、1927 番は銘に引用せず図像も採用していない。各篇のタイトル下にコラム・ピクチャーを描く原則がある中でこうした選択をすることからも、本文章句から連想して新約聖書のナラティヴな図像や特定の聖人の姿を描こうという余白詩篇とは全く異なる制作方針であることが窺える。

## f. 51

第 31 篇の挿絵には、ダヴィデの姿が見られない。画面左の丘にはキボリウムの天蓋がかけられ、

<sup>12</sup> バーバーはこの天使が、アギア・ソフィア大聖堂の聖土曜日のオルトロスで歌われるトロバリオンに関連すると指摘している。Barber, f.32v, Commentary, p.5.

<sup>13</sup> S. Der Nersessian, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge II: Londres, add. 19.352*, Paris, 1970, p.70.

<sup>14</sup> 『テオドロス』の銘は「ὁ ἅγιος(ς) τάφος(ς) 聖なる墓」である。

<sup>15</sup> 4 世紀、背教者ユリアヌスの治世に殉教した兵士であり、エジプトの総督。祭日は 10 月 20 日。殉教後、聖遺物はコンスタンティノポリスに移された。Barber, f.33v, Commentary, p.4.

<sup>16</sup> ἅγιοι よりも一段階低い称号である。基本的に修道士に用いられる。

<sup>17</sup> 『テオドロス』は首都のストゥディオス修道院工房で、同修道院長のために、同修道院の首席司祭によって制作されたことが明らかな写本であり、1066 年の基準作例でもある。Barber, f.34r, Commentary, p.4.



殆ど剥落しているものの、その下にキリストの半身が描かれていたことが薄く残った線から確認できる。中央丘の向こうに髯を生やした男性が立ち、両手を掲げてキリストに祈っている。画面右端に立つ男性の集団も、同じように左を見上げて両手を挙げている。キボリウムの下、丘の手前には、左隅に立った修道士の前に3人の髯のない若者が向き合い、対話の身振りを取る。右側の緑の丘の手前には両手を後ろに縛られた裸の男が炎の前に坐らされ、首と足に鉄枷をつけられている。男の左右に黒のモノクロームで有翼の悪魔が描かれているが、この部分の剥落は特に酷い。恐らく意図的に削り落とされたものであろう。

中央で祈る男の頭上には、31:2「幸いだ、主がその罪を数え上げず、その口に偽りが無い人は」から「μακάριοις ἀνὴρ ὁ<sup>18</sup> οὐ μὴ λογίσῃται(αι)<sup>19</sup> κ(ύριος) ἀμαρτίαν 幸いなるかな、主が(その)罪を数えない人」の銘文が書かれている。キボリウムの下で修道士に話しかける人たちの下には、31:5「私は私の罪を知った。／私は私の不義を隠しはしない／私は言った。／私は、意に背くが、私の不義を主に告白する、と。／するとあなたは私の罪である不信心をお赦しになった」を引用した「εἶπα ἐξαγορεύσω κατ' ἐμοῦ τὴν ἀνομίαν μ(ου) τῷ κ(υρί)ῳ 私は言った、己(の意)に反して私は我が不法を主に打ち明けるだろう」の銘文が見られる。3人の男性の話している内容が窺える。悪魔に挟まれた裸の男の右側の余白には「πολλὰ αἰ μ(α)στυ(ες) τοῦ ἀμαρτ(ω)λ(οῦ) 罪深き者の鞭は多い」とあり、31:10「多いのは罪びとたちの(受ける)鞭打ち。／憐れみが主に希望を置く者を取り囲む」を踏まえている。悪魔と男の間に黒い線が残っているが、これは男を打ち据えた鞭や棒であったのかもしれない。右上で祈る人々の隣には31:11「主に歓喜し、喜ぶのだ、(あなたたち)義なる者たちは。／誇らしげにするのだ、心の真っ直ぐな者たちはみな」から、「εὐφροάνθ(η)τ(ε) ἐπὶ κ(ύρι)ον κ(αὶ) ἀγαλλιᾶσ(θε) δίκ(αι)οι 主に喜べ、そして義しき者たちをして喜ばしめよ」の銘文が書かれている。

余白詩篇が描く第31篇を確認しよう。1927番も銘文に引用した31:2に『テオドロス』f.34v<sup>20</sup>が、キリストのメダイオンを仰ぎ讃える聖バルラーム<sup>21</sup>の立像を描く。特に聖人の剥落が酷いが、黒い上衣を纏った修道士の服装であることは判別可能である。キリストはメダイオンから右手を伸ばし祈りに応えている。『バルベリーニ』f.52も同じ章句に、短い白髪に白髯の無銘の聖人が立って祈り、上方から半身を現したキリストがそれに応じて祝福する様子を描いている。服装は黄土色のトーガに金のハッチングで衣襷文が描かれており、修道士の装束ではない。31:9「あなたがたは分別のな

<sup>18</sup> οὐ.

<sup>19</sup> λογίσῃται.

<sup>20</sup> バーバーは聖バルラームを31:1「幸いだ、その不義が赦された者たちは。／その罪が覆い隠された者たちは」に対応する図像としているが、デュフレンスの総覧では『テオドロス』、『バルベリーニ』を共に31:2に対応させている。Barber, f.34v; Dufrenne, *Tableaux synoptiques*, Psalme31. 『テオドロス』f.34vにリンク・マークが書き込まれていないため生じた齟齬であろうが、1節と2節はどちらも「幸いなるかな」と同じ形容詞で語り始めるものの(数は異なる)、瑕疵のない聖人に対応させるならば2節の内容の方がより相応しいように思われる。なお『バルベリーニ』f.52については、31:2の上にリンク・マークが記されていることが図版から確認できる。

<sup>21</sup> アンティオキアの聖バルラーム、4世紀の殉教聖人である。祭日は11月19日。『テオドロス』ではὁσιοςが冠されている。バーバーに拠ると彼の聖遺物はコンスタンティノポリスで発見されたそうだが、少なくとも大教会のティビコン、総主教座のカレンダーやBHG, 221-223を確認した限り、そのような記述はない。一葉前に登場した聖アルテミオスに関する記述(BHG, 172)と混同したものであろうか。もし首都に聖遺物があつた(と信じられていた)聖人が集散的に描かれているとすれば大いに検証の価値はあるが、11世紀余白詩篇の聖人たちのみを取り上げて詳細に論じる必要があるだろう。Barber, f.34v, Commentary, pp.4-5.

い馬や騾馬のようになってはならない。／それらは轡と手綱で顎を固定されれば、／あなたに近づこうとはしない」には『テオドロス』f.35 のみが挿絵を有する。玉座に坐るダヴィデの左右に手を挙げて対話の身振りをする男たちが立っており、右側の男は左手で下を示す。促されて余白下方を見ると、鞍をつけられた騾馬と馬が向き合っている<sup>22</sup>。剥落はあるものの右側に描かれた青灰色の馬の口元が残っており、明らかに轡と手綱の描写は見られない。本稿はここで筆を擱くこととする。

---

<sup>22</sup> それぞれ「騾馬」、「馬」と銘が付されている。

本稿は、JSPS 科学研究費若手研究 JP20K12857（研究代表者：辻絵理子）、及び同基盤研究（B）JP22H00621a（研究代表者：益田朋幸）の成果の一部である。